

〈表紙〉

論文種別

教育・研究活動記録

題目（和文・英文）

体育を通して人間力を育む大学体育助手の教育活動記録：ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成に基づく省察

Fostering Students' Life Skills through University Physical Education: A Reflective Account of a Research Associate's Educational Practice Based on the Development of a Teaching Portfolio Chart

全ての著者名及び所属機関（和文・英文）

篠原 航介

Kohsuke SHINOHARA

青山学院大学教育人間科学部

College of Education, Psychology and Human Studies, Aoyama Gakuin University

筑波大学大学院人間総合科学学術院および鹿屋体育大学大学院体育学研究科・大学体育スポーツ高度化共同専攻

Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, and Graduate School of Physical Education, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

連絡先（メールアドレス）

t26666@aoyamagakuin.jp

〈本文〉

本稿は、筑波大学と鹿屋体育大学による博士課程・大学体育スポーツ高度化共同専攻の必修科目として開講された 2026 年度「大学体育論」全 10 回のうち、第 7～10 回の授業で作成したティーチング・ポートフォリオ・チャート（栗田・吉田，2021）をもとに、助手としての教育活動を振り返り、今後の成長計画をまとめたものである。構成は、東京都市大学 FD 推進センター（2020）の「都市大版ティーチング・ポートフォリオ」を参考にした。以下、ティーチング・ポートフォリオを TP、ティーチング・ポートフォリオ・チャートを TP チャートと表記する。

はじめに

筆者は 2025 年 4 月より、青山学院大学教育人間科学部において体育科教育の助手として勤めている。現在は、筑波大学・鹿屋体育大学大学体育スポーツ高度化共同専攻の博士後期課程 1 年次として研究を継続しながら、一般体育の授業補助を担っている。本稿の作成にあたり自身の教育活動を振り返ったところ、「学生に豊かな人生を送ってほしい」「これから生きていく上で必要な力を育んでほしい」という思いが、自身の実践の根底に一貫して存在していることに気づいた。本稿では、主担当教員とは異なる立場で学生に関わる助手の教育活動に着目し、授業補助、学生支援、業務日誌による省察を通じて、将来、自ら授業を担当することに向けた成長課題を明らかにする。

1. 責務

筆者が 2026 年度に担当している主な業務は、教養科目である健康・スポーツ演習（フィットネストレーニング、テニス、卓球、サッカー、フットサル）およびスポーツ運動実習（バスケットボール、バレーボール、テニス、ヨガ、スキー、スノーボード）における授業補助である。加えて、体育用具の管理、学生対応、合宿を伴う集中授業の手配といった助手業務も担っている。授業補助では、用具の準備や安全管理に加え、見本の提示、学生への声かけ、活動への参加を通じて、担当教員と協働しながら学習を支援している。また、全国大学体育連合が主催するバレーボール、フロアボール、スノーボード、ゴルフ等の指導者研修会に参加し、自身の指導技術の向上に努めている。2025 年度には公益財団法人全日本スキー・スノーボード連盟（SAJ）公認スノーボードバッジテスト 2 級に合格した。

日々の助手業務については業務日誌に記録し、教育活動を継続的に振り返るための資料と
している。

2. 理念

筆者の教育理念は、大学体育を、運動技能の習得にとどまらず、学生が挑戦し、他者と
協働し、自らの健康を支える力を身につける場とすることである。本稿では「人間力」を、
体育・スポーツ場面において、礼節を重んじ、仲間と協働し、課題に対して自ら考え行動
するとともに、生涯にわたって運動に親しもうとする力として捉える。この定義に基づき、
教育実践の理念を次の3点に整理する。

理念1 礼節と協調性を備え、自ら考え行動できる人間力を高める

理念2 何事もまずやってみる姿勢を身につけ、課題を解決するプロセスを知る

理念3 運動を継続し、生涯にわたって健康の維持増進に努める

TPチャートの作成を通じて、人間力の育成、挑戦する姿勢の育成、生涯スポーツの実践
という3つの理念は独立したものではなく、「学生に豊かな人生を送ってほしい」「これか
ら生きていく上で必要な力を育んでほしい」という一つの願いから発していることに気づ
いた。この理念の原点には、筆者自身が体育・スポーツを通じて、技能の向上だけではな
い学びを得てきた経験がある。

筆者は小学生の頃から、体育や部活動の場面で、教員やコーチと一緒に活動したり、対
戦相手になったりしてくれることに大きな楽しさを感じていた。また、顧問の教員が生徒
とともに陸上記録会に出場し、年齢や立場にかかわらず挑戦を続ける姿を見たことは、筆
者自身が運動を継続したいと思うきっかけとなった。これらの経験から、体育・スポーツ
は、挑戦する姿勢、他者と関わる喜び、成長を実感する経験を育む場であると考えよう
になった。現在の授業補助においても、見本を示すだけでなく学生とともに活動し、苦手
なことや勝てない相手にも向き合う姿勢を示すことを大切にしている。大学体育で得た小
さな成功体験や前向きな挑戦の経験が、卒業後の生活において、困難に向き合う力、他者
と協働する力、健康を支える運動習慣につながることを願っている。

図1 TPチャート

3. 方法

理念を具体化するために、4つの方針と、それに対応する具体的な方法を設定している。

方針1 規律、ルールを守る（理念1に対応）

学生が社会に出た後も通用する規律性を身につけてほしいという思いから、まず授業者自身が模範を示すことを重視している。具体的には、授業の開始・終了時間を厳守し、用具の準備は授業開始前に行う。また、スポーツのルールを守り、相手に敬意をもって取り組む（方針2とも共通）。

8

方針2 主体的・対話的に学び、仲間と称え合う態度を育む（理念1に対応）

学生同士の関わりを通じて、対話的な学びと相互承認の姿勢を育てたいと考えている。具体的には、スポーツのルールやマナーを大切にし、相手に敬意をもって取り組むよう促す（方針1とも共通）。また、チームで作戦や振り返りを共有する時間を設け、チーム編成を毎回変えることで、多様な学生と関わる機会をつくる。

14

方針3 苦手なことやできないことにも積極的に取り組む態度を育む（理念2に対応）

失敗を避けることよりも、試行錯誤しながら挑戦する過程そのものを大切にしている。具体的には、苦手なことや勝てない相手にも挑戦する姿勢を授業者自身が示し、学生が自分の課題を見つけ、改善方法を考えながら活動できるよう、問いかけや声かけによって支援する。また、課題を段階的に設定し、小さな成功体験を積めるよう支援するとともに、見本を示すだけでなく学生と一緒に活動する（方針4とも共通）。

21

方針4 運動・スポーツを楽しむ、生涯にわたって継続する態度を育む（理念3に対応）

授業終了後も運動を続けてもらうために、授業の中で楽しさと成功体験を得られることを重視している。具体的には、学生の習熟の様子に応じて課題を調整し、成功体験を積めるよう支援するとともに、見本を示したり、一緒に活動したりすることで、運動の楽しさを共有する（方針3とも共通）。

これらの方針は、一つの実践が複数の理念の実現に寄与する関係にある。授業では、授業者が規律や挑戦の模範を示し、学生が個人またはチームの課題を見つけ、仲間と相談しながら試行錯誤し、次の活動に生かすという学習の流れを意識している。特に、学生が小さな成功体験を積み、授業者自身が見本を示しながら一緒に活動することは、苦手なこと

への挑戦姿勢を育むと同時に、運動・スポーツを楽しむ継続する契機にもなると考えている。

3.1 学生とともに活動する助手としての支援

方針3・4を具体化する実践の一つが、学生とともに活動することである。筆者は青山学院大学に着任するまで、卓球とテニスの経験がなかった。当初は学生に負けることも多かったが、勝てない相手にも挑戦し、未経験または苦手な学生とは一緒にラリーをしながら練習してきた。現在は、自分が何を考え、何を試して上達してきたのかを初心者学生に伝えている。できる見本だけでなく、できなかった過程を共有することが、挑戦する姿勢と課題を解決するプロセスを伝える方法になると考えている。

4. 成果と省察

本節では、筆者の教育理念が具体化された事例として、2025年度に実施された5日間のスノーボード集中授業における初級クラス指導を取り上げる。筆者は初級クラス17名の授業補助を担当した。根拠資料として、筆者の業務日誌、学生の感想文を用いた。

筆者は、「転ばずに連続ターンしながら滑ることができる」状態を到達の目安とし、最終日の滑走時に学生の技能到達状況を確認した。最終日の滑走時には、授業開始時にターンができなかった17名全員について、「転ばずに連続ターンしながら滑ることができる」状態を確認した。恐怖心を減らして安全に練習できるよう、顔や目線の向き、立ち方等を段階的に示し、習熟の様子に応じて声をかけ、成功体験を積めるよう支援した。

学生の感想文には、「初めは難しく不安だったが、難しいけれど楽しいものになっていった」との記述があった。また、「今後も続けていきたいと思うほどスノーボードが好きになった」、「スノーボードにはまり、友達に声をかけたところ、行く予定ができた」という記述もみられた。これらの記述から、技能の習得だけでなく、うまくできない過程を楽しめたか、授業後の運動継続につながったかという視点も重要であると考えた。

ただし、学生の変化は主担当教員や班の仲間、実習全体の環境によって生まれたものであり、筆者の働きかけだけによる成果とは断定できない。今後は、学生の感想文と業務日誌を照合し、どのような支援が学生の挑戦、協働、運動継続への意欲に結びついたのかを検討したい。

5. 目標

今後の目標は、「様々な先生から指導法を学ぶ」「様々な種目の技能を高いレベルで身につける」「自分の授業を持ち、理念を体現する」「業務日誌をつけて教育活動を記録する」の4点である。

短期的には、バレーボール、フロアボール、スノーボード、ゴルフ等の指導者研修会への参加を継続し、さまざまな教員から指導法を学ぶとともに、担当できる種目の幅を広げ、技能を高めたい。各研修会で学んだ指導法を授業補助の場で試行し、学生の反応と自身の気づきを業務日誌に記録する。また、2026年度中に学生の感想文と業務日誌を整理し、理念・方針・方法と学生の変化との対応を振り返る。

長期的には、種目を限定せず幅広い指導力をもった教員になることを目指している。その中でも、自身の専門である陸上競技に加え、大学の一般体育で広く扱われているバドミントンやバレーボール、集中授業として実施されるスノーボードについて、自分自身の授業を担当し、本稿で整理した3つの理念を体現したい。そのために、理念・方法・評価を一貫させた単元案を作成し、学生の技能だけでなく、挑戦、協働、運動継続への意欲の変化も捉えられる評価方法を検討していく。

おわりに

TPチャートの作成を通じて、助手として個別に取り組んできた業務や指導の一つひとつが、学生の将来の生活を支える力の育成という一つの願いに根ざしていたことに気づいた。自分が教育実践において何を大切にし、今後何に取り組むべきかが明確になったことは、大きな収穫である。今後は、博士課程での学びと並行して、本稿で整理した理念・方針・方法を、業務日誌や学生の声に基づいて継続的に検証・改善する。そのために、学生とともに活動し、記録し、省察しながら、助手としての教育活動を継続的に発展させ、自分自身の授業をもつ教員として理念を体現できるよう努めていきたい。

謝辞

本稿およびTPチャートの作成にあたり、ご指導いただきました筑波大学・木内敦詞教授に、心より感謝申し上げます。

1 文献リスト

- 2 栗田佳代子・吉田 壘, リフレクションを可視化するティーチング・ポートフォリオ・チャート作成講座, 医学書院, 2021.
- 3
- 4 東京都市大学 FD 推進センター, 2020 年度ティーチング・ポートフォリオ成果報告書,
- 5 [https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-](https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-605c90e90d057.pdf)
- 6 [605c90e90d057.pdf](https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-605c90e90d057.pdf) (2026 年 8 月 1 日閲覧).

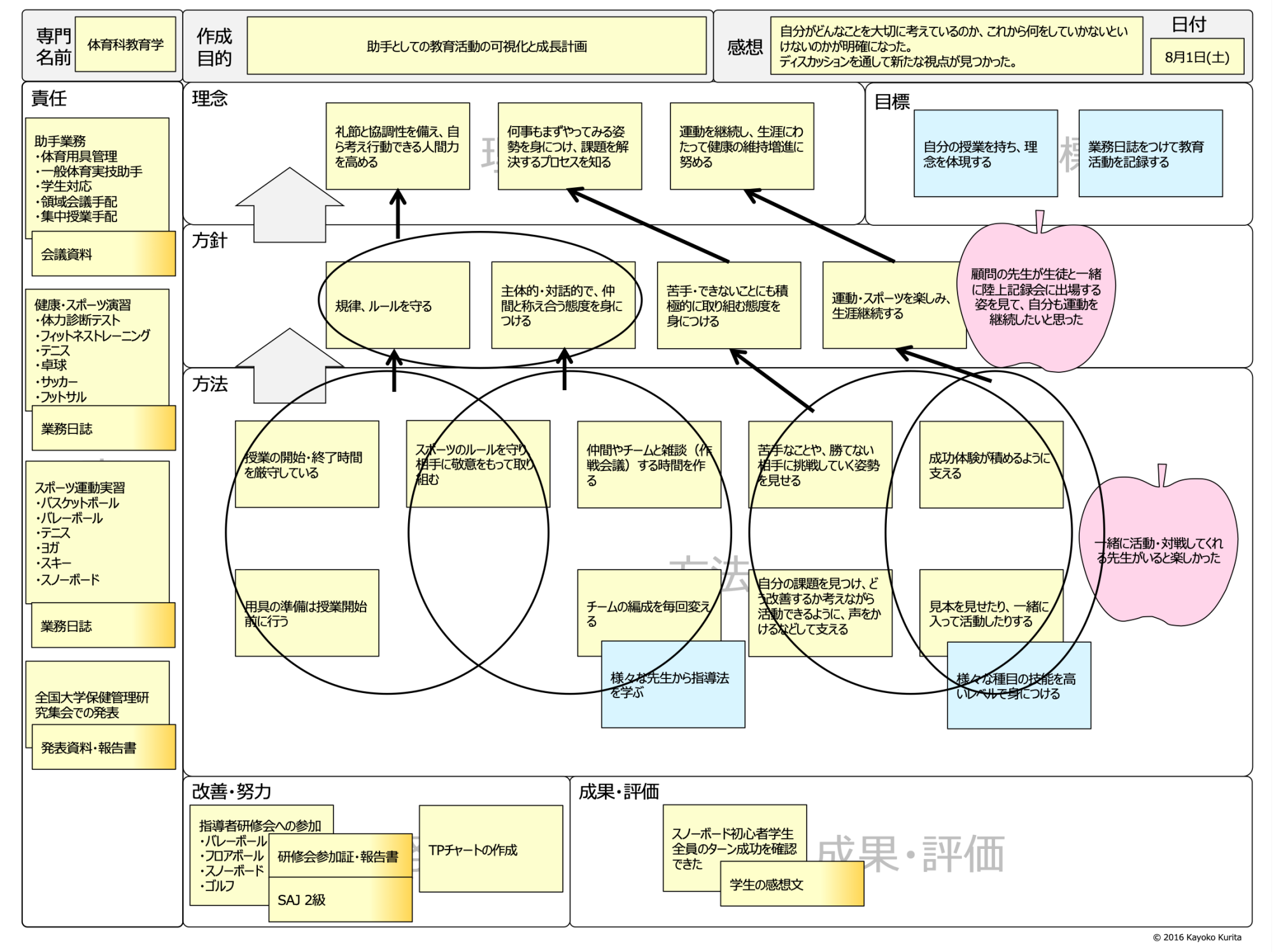


図1 TPチャート